NEXT CONCERTS
›› 次回東京定期演奏会

第773回

サントリーホール

2025年9月12日（金）19：00開演 18:30〜　プレトーク　舩木 篤也氏
13日（土）14：00開演 13:20〜

カーチュン・ウォンが挑む、謎多き傑作・マーラー第6番の真髄

1回券料金	S ¥9,500	A ¥8,000	B ¥7,000	C ¥6,000	P ¥5,000	Ys（25歳以下）¥2,500

※障害者手帳をお持ちの方は割引きがございますので、サービスセンターにお問い合わせください。

次回東京定期演奏会指揮者にインタビュー！

カーチュン・ウォン 編

きき手　八木 宏之

—カーチュン・ウォンさんと日本フィルが継続的に取り組んでいるマーラーの交響曲もいよいよ6曲目となり、9月の第773回東京定期演奏会では《悲劇的》の愛称で知られる交響曲第6番が演奏されます。マエストロにとって、第6番はどういった位置付けの作品なのでしょうか？

　トランペットを吹いていた青年時代から、私はマーラーの交響曲第6番が大好きでした。この交響曲は「ブラスのシンフォニー」と言っても過言ではないほど、金管楽器が活躍する作品で、全曲を通して金管セクションが重要な役割を担っています。

　しかし、指揮者としてこの交響曲を指揮することには慎重でした。というのも、第6番を書いた後にマーラーの人生に起きた様々な悲劇、娘の死や自身の心臓病、ウィーン宮廷歌劇場での失脚などを考えると、とても不吉な作品に思えたのです。第4楽章で振り下ろされるハンマーの響きには、マーラーのその後の人生の予告、あるいは来るべき悲劇への警告が含まれています。私は少し迷信深いところがあるのかもしれません。第6番を初めて指揮したのは、兵庫県立芸術文化センター管弦楽団との演奏会（2024年11月）だったのですが、このときはオーケストラの皆さんが「そんな恐ろしいことは起きないから大丈夫」と励ましてくれました。それ以降第6番は指揮していないので、今回の日本フィルとの公演が私にとって2回目の演奏となります。

—お話にも挙がったハンマーの響きは、聴き手に強烈な印象を残します。ハンマーを何回打つべきかは、長く議論の対象となってきましたが、マエストロはその点をどのように考えられていますか？

　マーラーは、初稿ではたくさんの音を楽譜に書き込み、それを推敲して音を刈り込んでいく作曲家でした。ハンマーの打撃も最初は5回でしたが、それが3回になり、最終的には2回になりました。マーラー自身もハンマーの響きに不吉な予兆を感じ取ったのかもしれません。ですから、ハンマーの打撃は2回というのが、作曲家が最終的に望んだことであったと理解しています。とはいえ、作品全体の構成やドラマトゥルギーの観点からは、ハンマーの打撃は3回あった方がしっくり来るようにも感じます。ですから、ハンマーについての判断は、作品と長く向き合っていくなかで、今後変化していく可能性もあるでしょう。

—〈アンダンテ・モデラート〉と〈スケルツォ〉の演奏順もまた、様々な意見が飛び交う問題ですね。

　〈アンダンテ〉と〈スケルツォ〉の順番も、長らく議論されてきました。マーラーの交響曲のなかでも、第6番がとくにクラシカルな形式を持つ作品であることを考えれば、第2楽章に〈アンダンテ〉、第3楽章に〈スケルツォ〉を置くことが自然に思われます。ハイドンやモーツァルトの時代から、交響曲のスケルツォは伝統的に第3楽章に置かれてきました。一方で、第1楽章の冒頭から続く行進曲の世界を〈スケルツォ〉が引き継いで、ようやく第3楽章の〈アンダンテ〉でほっと一息をつく、という構成にも説得力があるでしょう。マーラー自身もどちらを先に演奏すべきか悩んでいたように、この順番が絶対に正しいということはないのです。

　ハンマーの回数も、〈アンダンテ〉と〈スケルツォ〉の順番も、オーケストラとリハーサルをするなかで、その週の気温、湿度、日差しの強さなども考慮して、芸術的にもっともふさわしい判断をしたいと思っています。どんな選択をしたとしても、最後に辿り着くところは同じであり、作品の本質は決して変わりません。第6番が真の傑作であることを、そうした事実はなにより示しています。

—カーチュン・ウォンさんと日本フィルのマーラー・ツィクルスは、多くのマーラー・ファンに注目されていますが、今回の演奏会で初めて第6番に接する人もいるかと思います。マエストロの考える聴き方のヒントなどがあれば教えてください。

　第6番でなにより注目していただきたいのは、〈アンダンテ〉の奥深さです。マーラーの緩徐楽章では、第5番の〈アダージェット〉がよく知られていますが、これはアルマに対する愛を表現した、エロティックな要素を含む音楽でした。一方で第6番の〈アンダンテ〉には、日々の何気ない営みの美しさを感じることができるでしょう。

　今回の第6番は、3月に演奏した第2番《復活》のドラマを受け継ぐものになると思っています。第6番は音の数がとても多く、極めてヴィルトゥオーソ的な作品ですし、強靭なスタミナも求められます。すでにマーラーの交響曲を5曲、ともに演奏してきた日本フィルと、作曲家の個性が強く表出した第6番に取り組むことができるのを今からとても楽しみにしています。

助成：
文化庁文化芸術振興費補助金
（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人日本芸術文化振興会
文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan